



# ピッポ新聞

2002

No.170

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500 円

編集・発行 伊藤俊男

## ピッポ

〒424-0886 清水市草薙1-6-3

TEL&FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp/>

Email [pippo@diana.dti.ne.jp](mailto:pippo@diana.dti.ne.jp)

### 物語の楽しさ・豊かさ

「お話」(物語)を聞くことはとても楽しいことです。文字のない時代から人間は「お話」を伝承してきました。人びとは何よりも楽しみのために「お話」を語ってきたのです。ときには人間の知恵をそこに織り込み、そして、ある場合には宗教的な意味合いを持たせて、それを子孫に伝えてきました。

このお話を聞く楽しさは、今も変わることはありませんが、身近な語り部が存在しなくなり、「お話」を聞くという状況も大きく変わりました。いま、わたしたちは本を読む、あるいは読み聞かせというを通じて、その楽しみを享受することが多くなりました。しかし、これはあくまでも楽しみや喜びのためであって、ある目的や意図をもって、それはなされるべきではないのです。

ちかごろ学校において、読み聞かせや「読書の時間」が盛んになってきているのですが、そのやり方に少し疑問を感じるのです。いえ、そのこと自体は歓迎すべきだと、ほくも認識していますから、誤解をなさらないように願います。

「ついつい」とはあまり生真面目に、かつ熱心に、さらに上からやられると、おかしな方向に行ってしまうのではないかという、ちょいとした危惧なのです。元もと読書などというものは個人的な行為なのですからな。

ましてや、本を読んでやるのは、「子ども」に「感

動」を与えるため」などと、講演して歩いていく教育関係者の存在を知るにおよんでは、危惧を抱かずにはいられないのです。

そつえば、本の業界でも、「お話キャラバン」(これはある大手の出版社がスポンサー)やら、「ブックトークを子どもたちに」(広告代理店の企画?)「朝読書のためのテキスト(?)」コーナーを設けよう。それにはこんなブックリストを「これは東販(本の取り次ぎ)が、書店への販促の呼びかけ掛けのため」・・・と、なにやら胡散臭いのがいっぱいあります。

こついつい運動は、一見子どもたちのためなのですが、多くの場合子どもたちの迷惑にしかならないものなのです。

昔、おじいさんやおばあさんは囲炉裏端で、孫たちにどんな気持ちで「お話」を語ってくれたか、このことを考えればよいのです。

そうです。子どもたちを楽しませ、喜ばせるほかに何があるのでしょうか。

子どもたちに語ってくれたおじいさんおばあさんもまた、自分の子供時代には、そのまたおじいさんやおばあさんから「お話」を聞き、それが楽しかったからこそ、今度は自分の孫たちと同じ楽しみを与えるため、語ってくれたのです。

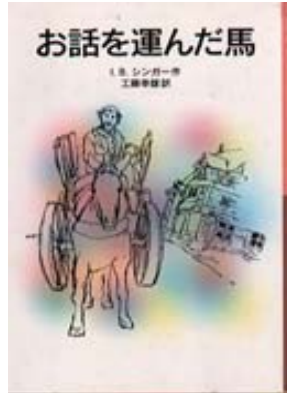
子どもは「お話」を聞きながら、物語の主人公といっしょに、この世とは別の世界へ旅をし、悪者と戦って、おしまいに必ず幸せになるのですから、面白くなかるうはずがありません。

しかも、この物語での経験は、きつと、その子の未来への貴重な礎の一つになってくれるに違いありません。

こうして「お話」(物語)は伝承されてきたのです。だから、もつと単純にもつと自然に子どもたちに読み聞かせをやればよいのです。

この視点にたてば、古今東西おもしろい物語の本は、いっぱいあるのですから、子どもたちには、読み聞かせも大いに楽しいものになることでしょう。そこで、今回はお話の楽しさ、豊かさを存分に味わえる本の何冊かを紹介しましょう。さあ、おじさんの本の「お話」のはじまりーはじまりー!

『お話を運んだ馬』(シンガー・文工藤幸雄・訳 672円 岩波少年文庫)

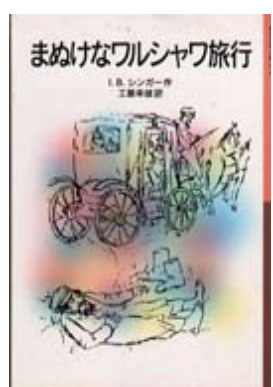


の中で、作者シンガーは、子供時代のお話の名手ナフタリに対して、村々を回って歩く本の行商ツェブルンに「一日がおわると、もう、それはそこにない。いつたい、なにが残る。話

のほかには残らんのだ。・・・」さらに、「きょう、わたしたちは生きている、しかしあしたになったら、きょうという日は物語に変わる。世界ぜんたいが、人間の生活すべてが、ひとつの長い物語なのさ」と語らせていますが、物語というものの本質の一つを語っていると思います。

さて、この本の中には8編の短編が収められています。中に「滑稽話」が多く含

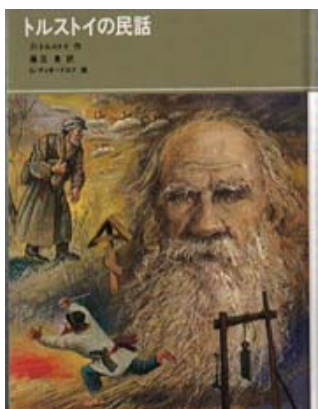
まれています。そこには間抜けやとんまな長老たちがゾロゾロ出てきて抱腹絶倒な話が展開しますが、これらの「話」には、人間というものの本質が描かれているのではないかと感じました。同じ



岩波少年文庫からシンガーの『まぬけなワルシヤワ旅行』も出ています。

『トルストイの民話』(トルストイ・文藤沼貴・訳 2415円 福音館書店)

も、同じように人間というもののいとしさ、悲しさ、おもしろさなどを感じさせてくれる短編集です。



この短編集はトルストイが『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』などの既に書き上げ、作家としての名声をあげたあと、新たな気持ちで書いたり、再話したりしたのだそうです。「イワンのばか」など

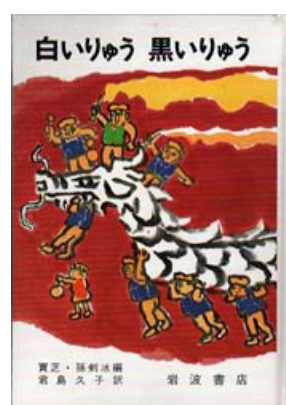
もここに収録されています。次は『魔法のオレンジの木』(ウォルクスタイン・採話 清水真砂子・訳2415円 岩波書店)これは中米ハイチのお話を、アメリカのウォルクスタインという人が何度

もハイチを訪れて採話したものです。ハイチの人たちは大人も子どもも「お話」を聞くのが大好きなのです。ハイチではだれもお話を聞かせたい人が「クリーク?」といえば、集まった人たちが「クラック!」と答えるのだそうです。よし、やってみよう。人びとのお話を



楽しむ様子が目に見えるようですね。表題の「魔法のオレンジの木」というお話などは、登場する女の子の知

恵に感心すると同時に、ハイチの人々の意外と「カラッ」とした民族性が感じられるお話です。ここに集められた話は昔話ばかりでなく結構新しい話も載っていますよ。お話の豊かさやおもしろさを味わうのなら、『白いりゅう黒いりゅう』(中国のた

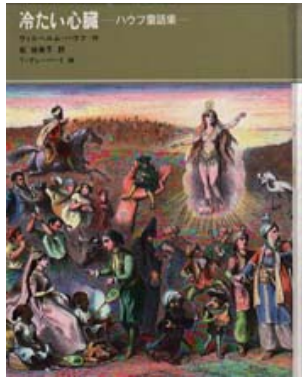


そのおはなし チャーチ・スンチエンピン・編 君島久子・訳 赤羽末吉・絵 1680円 岩波書店)などもお薦めし

たい一冊です。中国の少数民族が何千年も伝えた話を採話したのですが、中の「天地のはじめー巨人グミヤーの話」プーラ

ン族の話などとてもスケールが大きくて楽しい話です。

ドイツ人のハウフの書いた『冷たい心臓ーハウフ童話集ー』(ヴェルヘルム・ハウフ・文 乾侑美子・訳 2625円 福音館書店)も、物語というものの楽しさを十分に堪能できる一冊です。この本は「隊商」「アレツサンドリアの長老とその奴隷たち」「シユペツサルトの森の宿屋」の三つの童話集が集められて一冊の本として出版されました。



いづれもがそれぞれ梓物語(千一夜物語)のように別々の話がある状況の中で続けて一つの物語として構成している)の形式になつています。その中の「アレツサ

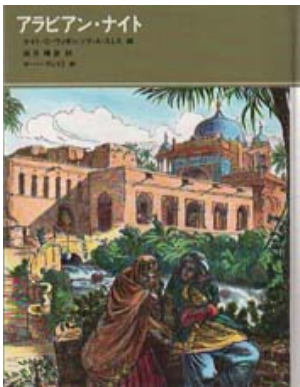
ンドリアの長老とその奴隷たち」の中に、老人と若者の会話で物語についてのこんな会話が印象に残りました。  
 若者は老人に「・・・ご老人、ぼくらはなぜ、あのころ、あんなに喜んで物語をきいたのでしょうか。そうしてなぜ、いまでも、物語をきくのがいちばんたのしいのでしょうか?」「では、説明してあげよう」老人は答えました。「人の心は、水よりも、もっと自由に動きやすいものなのだ。・・・だから人の心のうちには、日常から離れて高くのぼり、より広

い空間で、より軽く、より自由に動きたいという、憧れが有るのだよ。例え夢の中だけでもね。若い友人諸君、君たちもいつていたね。『ぼくたちは、そういう物語の中で生きるのです。その人物とともに考え、感じるのです』と。これこそ、物語の魅力が生まれるもとのだ。・・・」

この物語に対する問答は小説とおとぎ話の違いなどに触れながらさらに続くのですが、紙数の関係で本の一部しか紹介できません。

ドイツの大人や子どもに聞くと、このハウフの物語はほとんどの人が知っていると思えるそうです。面白い物語がいくつも語られていきますから是非お読み下さい。

語られていくといえ、『アラビアン・ナイト』(ケイト・D・ウィギンとノラ・スミス編 坂井晴彦・訳 2625円 福音館書店)も、いろいろな物語が集められた本です。元もとは異なつた時代や、地域の物語を纏めるのに都合が良いように、後に裏切られた王様が、毎晩一人の女性を殺していた、それをやめさせるため



に一人の女性が毎夜、王様に物語を語つたという設定で編まれたものがこの『アラビアン・ナイト』なのです。ここには8編が

載っています。『アリババと40人の盗賊の話』や『船乗りシンドバットの物語』などはご存知の方も多いことでしょう。

『きつねのルナール』(レオポルド・シヨヴォー・編 山脇百合子・絵・訳 1365円 福音館書店)も、中世フランスの複数の作者によって書かれた「きつねも



のがたり」(動物叙事詩)で、それを、シヨヴォーが子ども向きに編集したのが本書です。ここには22話あり

ますが、ルナールというきつねの悪さにはあきれてしまいますが、何故かルナールを憎むことができません。エスプリに富んだ話が多いのは、フランスならではのところなのでしょう。

さて、今回の紹介はこの辺で閉じることにいたします。

**ねー、この本読んだ?**

『どつぶつすゝろく かがくのとも1月』(あべ弘士・新沢としひこ・作 あべ弘士・絵 410円 福音館書店)

これは大きな双六です。冬のお休みに家族で楽しむには最適なゲームです。両面それぞれ違う双六になっています。片方は

「ちきゅうめぐりどろぶつすくろく」で、数のサイコロを使います。もう一方は「みんないきてるどうぶつすくろく」で、こちらは色のサイコロをつかって遊びます。「あつ、お父さんペンギンのヨチヨチ歩きで部屋を一周と書いてあるよ。さあ、まわってまわって！」何てね。



『幼い子の詩集 パタポン2』(田中和雄・編 1312円 童話屋)

「ちよと前に「声に出して読みたい日本語」という本がベストセラーになりましたが、これは子どもに声をあわせて読んでもいい「詩集」



です。こんな詩も。

春の朝

時は春

朝は七時、

片岡に露みちて、

揚雲雀なのりで、

蝸牛枝に這い、  
神、そらに知るめす。  
すべて世は事も無し。

ロバート・ブラウニング 上田敏・訳

『かえるの平家ものがたり』(日野十成・文 斎藤隆夫・絵 1575円 福音館書店)

がまじいさんが琵琶を片手に子どものカエルに語り出す。ベンベンベン……。昔々このげんじぬまの昔のはなし……。岸の向



うつの異獺が、多くのカエルを手に掛けた。そこでカエルの大将を先頭に、黒猫に戦いを挑んだが、味方は一方的に敗退するばかり。そこで若

武者つしわかまるが一計を案じて、ついに黒猫をたいじした。ベンベンベン……。調子を付けて読んでやるとおもしろい。絵もカエルの武者がいっぱいでできて絵巻物を見るようでおもしろい。

復刊のお知らせ

福音館書店から2003年2月に4点が

『ひよこのかずはかぞえるな』(イングリット エドガー・ドーリア・作 瀬田貞一・訳 1260円)

『まりーちゃんとおおあめ』(フランソワーズ・作 きじまはじめ・訳 150円)

『七わのからす グリム童話』(フェリクス・ホフマン・絵 せたていじ・訳1365円)

『すばらしいとき』(ロバート・マックロスキー・作 わたなべしげお・訳 1575円)

年始年末のお店の営業は

12月は28日まで通常営業(朝9時~午後7時まで) 1月は4日から営業いたします29日から3日まではお休みいたします

### 編集後記

先月、上京のおり、総武線に乗って驚いた。そこには座席が無いのである。話には聞いていたのだが、

実際に見たのは初めだった。なんだか自分が家畜や荷物になったようで、腹立たしかったが、慣らされてしまった都会人は腹も立たない様子。よく見ると、座席はしまい込まれていた。十時になると座席をおろして良いと書いてある。丁度十時だったので椅子をおろそうとしたら、びくともしない。乗客が自主的におろすのではなく、向こう側のシステムだった。こういふのは事故の場合など考えてはいないのだろうな。オレは人間なんだぜ。あー腹が立つ!

## インフォメーション